

第29回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要

I 開催場所および場所

日時：2025年7月3日（木）13：30～15：30

場所：大熊町立学び舎ゆめの森 サブアリーナ（〒979-1306 福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平 2019 番 1）

II 委員

別紙名簿のとおり

III 資料

- ・議事次第
- ・参加者名簿
- ・【資料1】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿
- ・【資料2】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第28回）議事概要
- ・【資料3】令和7年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等の構成、取組一覧
- ・【資料4】令和7年度双葉郡教育復興ビジョン実施計画
- ・【資料5】令和7年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施報告_250626
- ・【資料6】各町村の現状と課題資料
- ・【資料7】令和7年度双葉郡町村立学校等の現況調査票
- ・【資料8】福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告資料

IV 議事

1. 開会

1) 開会挨拶

○館下副座長（双葉町）

本日が第29回となる協議会だが、これまで着実に実績を積み上げてきており、今後も国や県の関係機関のご指導を賜りながら、8町村がそれぞれの地域特性を生かし、双葉郡教育復興ビジョンを推進してまいりたい。本協議会での先進的な事業の成果を、宮崎県日向市の広域圏社会教育推進協議会や栃木県市町村教育委員会 連合研修会において発信できたことは大変有意義であった。現在、これまでの経過を『双葉郡教育復興の歩み』として冊子にまとめる作業を進めている。本日の協議においても忌憚のないご意見をお願いしたい。

2) 委員自己紹介（省略）

2. 前回（第28回）議事概要確認【資料2】

3. 議事

1) 今年度の各取組実施状況について【資料3】【資料4】【資料5】

○館下副座長（双葉町）全体

令和7年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等構成は資料3のとおりである。各双葉郡8町村の小中高の児童生徒、教職員が同じベクトルを向いて取り組んでいるところだ。取組のねらいは、探究学習を基盤に、子供の主体性を重視したものとなっている。今年度も本ビジョンの推進についてよろしくをお願いしたい。

○館下副座長（双葉町）双葉郡地域学校協働本部会議

双葉郡地域学校協働本部会議は、多様な主体との連携を図り、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことを目的に開催している。会議の中で、各町村の連携をもっと深められないかという意見が委員から出された。子供たちがやりたいことに対して、それをサポートする人材が自分の町内で見つからない場合、8町村内から適任のコーディネーターを派遣する人材バンクのようなものがないかというものである。こうした課題を一つずつ解決しながら今後も進めてまいりたい

○早川委員（楡葉町）ふるさと創造学サミット

6月23日に第1回目の実行委員会を開催し、今年度のふるさと創造学サミットは11月29日にふたば未来学

園中学校・高等学校で行うことを決定した。ワンセッション30分の内容だが、前半15分を発表、後半15分を「学びあいセッション」という対話の時間に充てる予定である。対話によって、自分とは異なる考えに触れ、深く考える時間としたい。トータル3セッションで、最大33の発表を予定している。

○武内委員（富岡町）双葉郡小学校絆づくり交流会

絆づくり交流会は、子供たちだけでなく、教職員の交流や情報交換の場の確保を目的にスタートした。今年度の第8回は7月29日を予定している。これに向け実行委員会を2回ほど開いた。小学生の参加者は昨年より30名増の254名の予定であり、中高生の実行委員は現時点で8名のエントリーを得た。ただ、参加人数が増えたことで保護者の参加が厳しくなっている。活動に対する理解を得るためにも、見学の機会の確保が課題である。

○根本委員（広野町）双葉郡中高生交流会

6月4日に第1回実行委員会を開催し、今年度の交流会は8月1日、県立ふたば未来学園を会場に実施することとした。今年も選択制参加型のワークショップ形式で実施する。昼食前の30分間を交流の時間に設定するほか、交流を深める内容について検討している。参加人数が増えているため、中学生の参加については希望を募る形になるが、高校生の参加が少ないため、ふたば未来学園の協力を得ての実施となるが、ほかに浜通り地区の高校生にも案内を出す形で進めたい。

○堀本委員（川内村）ふるさと創造学教員研修会／双葉郡子供未来会議

今年度のふるさと創造学教員研修会は8月28日に「学び舎ゆめの森」で開催予定である。初めに南郷校長から全体的なお話をいただき、その後、ふるさと創造学の授業研究となるが、今年度は上智大学の奈須正裕先生をお呼びしている。奈須先生は中央教育審議会の委員や教育課程部会の部会長を務められており、具体的な示唆をいただけるものと考えている。

教職員による双葉郡子供未来会議は2月に予定しているが、これは双葉郡の子供たちにどのような資質・能力を身につけさせるかをテーマに行うものである。

○松本委員（葛尾村）ICT活用推進・広報誌編集委員会

国のGIGAスクール構想の推進により1人1台コンピューターが実現しており、教育の現場における効果的な活用が求められている。当委員会においては、各学校での活用事例の情報共有を図ることで、よりよい学習環境を整えたいと考えている。

広報については、震災後10年が経過し、震災後に生まれた子供たちが大半を占めるため、震災を経験した卒業生の経験や現在の児童生徒の取組を外部へ発信する意味でも、広報誌「ふたばの教育」の役割は重要になっている。今年度も各学校から素材を提供していただき制作を進めている。

○館下副座長（双葉町）その他

現在、「ふるさと創造学」の取組が東京書籍の教科書に掲載されているが、令和7年度発行版においても「新しい歴史」に継続して掲載されることになっていることを情報として共有したい。

2) 各町村教育委員会の現状と課題【資料6】【資料7】

○横山委員（浪江町）

浪江町の園児・児童生徒数は毎年10名ぐらいつづ増えており、今年度も増加を見込んでいる。「ふるさと創造学」では、水素タウン構想を中心とする新しい価値観とともに、歴史・伝統の学びに取り組んでいる。昨年度、子供議会で出された「国道6号沿いに24時間営業の飲食店がほしい」という提案を受け、このたび「すき家」がオープンした。子供たちも、自分の意見が通ることを実感して張り切っている。防災教育としては、今年度より立命館大学と連携して新たな取り組みを開始した。現状、子供の数が増えているため、こども園の拡張工事を行うこととしている。

○松本委員（葛尾村）

避難指示解除から9年が経過したが、帰村率は29%と、依然として厳しい状況となっている。学校の状況としては、幼稚園11名、小学校15名、中学校7名と少人数であるが、一人一人に目が行き届く少人数教育の利点を生かし、弱点については、近隣他校との交流やオンラインによる合同授業を取り入れることで補完するよう努めている。グローバル人材育成として、幼少期から外国語に触れさせるとともに、中学生の海外研修も予定している。地域連携の取組としては、村を挙げた運動会の実施や、地域の方を招いての給食試食会、学校での花の定植作業などに努めている。

○館下副座長（双葉町）

双葉町は、いわき市錦町の仮設校舎において教育活動を行っており、今年で12年目となったが、いよいよ町に戻っての学校再開に向けて始動した。現在、令和10年4月の開校を目標に進めている。場所は旧双葉中学校敷地に決定した。課題として、現在の町立幼稚園・小中学校の閉園・閉校準備が挙げられる。保護者へ十分な説明をしているが、様々なケースがあるため、きめ細かく対応していきたい。また、教職員の確保が大きな課題となっている。今後の経過については折に触れて報告させていただく。

○佐藤委員（大熊町）

（報告は午前中の説明で代える）

○武内委員（富岡町）

町内での開校から4年目を迎えるが、順調に教育活動を行っている。園児・児童生徒数は増加傾向にあり、幼稚園においては、施設の不足と保育士の不足が課題である。昨年度、学校のそばに放課後児童クラブを設置し、現在、46名が登録している。引き続き保護者が安心して子育てできる環境を整えていきたい。昨年度は転入生が21名であったが、保護者間のつながりが希薄だったことから、「学校を応援する会」を発足し、交流の機会としている。転入生の中には日本語ができない子供もいるため、しっかり対応できるよう整えていきたい。

○堀本委員（川内村）

川内小中学園は令和3年度に開校し、5年目を迎えている。後期課程教員による前期課程への乗り入れ授業は非常によい効果が現れている。交流事業として、5年生は北海道士別市、6・7年生は長崎市の訪問を訪問し、グローバル人材育成として、後期課程の生徒に「ブリティッシュヒルズ研修」を実施している。学園内に村営の学習塾とピアノ教室を設けているほか、英語検定、漢字検定の補助も行っている。また、病児・病後児保育施設の広域利用やファミリーサポートセンター事業も開始したところである。教職員の加配と、支援員、SC、SSWの配置について、今後も継続的な措置をお願いしたい。

○早川委員（檜葉町）

少しずつ児童生徒数が増加しており、高校生を含めれば約400名が町内で生活している。将来、地域の復興や発展に貢献できるような教育としたい。また、昨年度、県立ふたば支援学校が開校したため、幼小中に加え、支援学校との連携を図っていきたい。現在、檜葉町がめざす英語教育の基本プランについて検討しているところだ。こども園の0歳児が増加しており、保育士確保が課題となっている。また、外国籍の家族や支援を要する児童生徒が増えているため、支援員を含め、財政的な支援をお願いしたい。

○根本委員（広野町）

広野町では、今年から新たな広野町教育ビジョンを作成し、こども園・小学校・中学校合同の授業研究会を開催するなど、子供の学力向上に努め、小中学校の図書の実も図っている。また、地場産物を豊富に使用した給食を提供するなど、食育にも力を入れている。グローバル教育の推進策としては、ブリティッシュヒルズでの異文化交流活動や東日本国際大学留学生との交流などを実施している。課題としては、共同調理場の改築、小学校の大規模改修、中学校の改築に向けての予算の確保が挙げられる。また、中学校では特別支援学級が開設できないため、特別な支援を要する子供の継続的な教育について課題がある。

○堀野委員（文部科学省）

〔質問〕いくつかの自治体で生徒が増えているという話があったが、移住促進策が功を奏しているのか、企業誘致によるものなのか、どのような事例が多いのか。また、広野町では学校図書標準を確保するためにどのような努力をされたのか教えていただきたい。

○武内委員（富岡町）

〔回答〕昨年度は21名の転校生があったが、年々、帰町する家庭より移住してくる家庭の率が増えている。また、年齢層の低い子供ほど移住者が多く、受験を控えた中高生は帰町者が多い。町内にインドネシアの技術者を雇用している企業があり、インドネシアからの転校生はその家族であることがほとんどだが、フィリピンからの転校生は日本人男性と結婚した母親とともに移住してくるケースが多い印象である。日本語ができない状態で転入してくることもある。

○早川委員（檜葉町）

〔回答〕檜葉も同様だが、若者世代が地元に残って職に就き、彼らの子供の数が増えている側面もある。また、檜葉町は地元企業でベトナム系の人材を雇用しており、その企業の従事者が家族を連れてきて、こども園へ入所させている例もある。

○根本委員（広野町）

〔回答〕学校図書については、きっかけは奈良の南都隣山会からの寄附であったが、その後、町に予算折衝して標準図書数をクリアするように進めている。震災時に傷んだり紛失した図書が大量にあったため、学校司書を入れて学校図書館の充実を図っているところである。

○中田座長（放送大学）

〔質問〕低年齢の子供が増えているということだが、もともとの住民の子供ではなく、移住者の子供の年齢が低いことが多いということなのか。また、移住者というのは、外国籍の方が新しい職を得て移住してくる率が高いのか。

○武内委員（富岡町）

〔回答〕ほぼ町内・郡内での仕事のための移住であり、子供の年齢層としては低学年のほうが多い。具体的には、最も多い小学2年生は19名だが、中学3年生は4名である。転入者は外国籍の家族ばかりでなく、若い世代の家族も多い。

○幾橋課長（大熊町）

〔回答〕大熊町の移住者は20～30代の方が増えている。理由としては、町内にインキュベーションセンターがありベンチャー企業が集まっていることなど複数の要因が挙げられる。また、大熊町は、住民票ベースで10代までの人数が全体の1割を超えている。これは、「ゆめの森」に子供を入れたいという教育移住の方が増えているためであり、実際、8割近くが移住者の子供である。

○堀野委員（文科省）

〔質問〕移住してくる方の移住元としては、東北が多いとか、関東が多いとか、何か傾向はあるのか。

○武内委員（富岡町）

〔回答〕全国各地からで特にこの地域ということはないが、前の学校で思うような学校生活を送れなかった子供たちが選んでくれている側面もある。

○根本委員（広野町）

〔意見〕転入者は少人数の教育に希望を持って移住してくる。しかし、教員や支援員の数が足りなければそれを支えることが難しくなるため、その点を考慮いただきたい。

○堀野委員（文科省）

〔回答〕文科省としても、必要な人員確保のための予算獲得について努力したい。なお、特別会計から一般会計に移行するタイミングではあるが、地元の要望を聞きながら進めてまいりたい。

3)ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告【資料8】

○對馬委員（ふたば未来学園）

（昨年度のトピックスは資料のとおり）進路については、この3月、東京大学、東北大学、東京都立大学など、多くの大学合格を勝ち取ったほか、就職も含め、それぞれの道に進んでいる。本校の卒業生が、いずれ研究者としてF-REIに就職するような姿を思い描いている。卒業時のアンケート調査では、本校での学びにより社会や地域との関わりを見いだした生徒が7割を超えており、これは全国平均より高い。ただ、探究的な学びが浸透したことにより、全国的にもこうした意識は高まっている。ふたば未来学園ができて今年で10周年になる。今年の10月には開校10周年記念式典を行うが、ふたば未来学園が多くの期待を背負ってできたことを思い返し、身が引き締まる思いである。今後ともお力添えをお願いしたい。

○草野教育制度改革室長（文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課）

〔質問〕卒業生が県内外に旅立ち、また戻ってくるケースもあると聞くが、卒業生とつながり続けるためにどのような工夫をしているのか。また、どの程度の卒業生と連絡が取れる状態にあるのか。

○對馬委員（ふたば未来学園）

〔回答〕卒業生とのつながりは、主に探究的な学びのカリキュラムの中で協力してもらい形をとっており、毎年、年間で20人ぐらいに声をかけている。また、発表会等において卒業生の発表ブースを設けるなど、つながりを維持している。先月、同窓会の総会を開催したが、卒業生の肌感覚では、社会人になっている卒業生400～500人のうち、双葉郡内に戻ってきている者は50～60人ほどではないかということだった。なお、実態をデータとして得るために、現在、卒業生全員にアンケート調査を実施している。

○根本委員（広野町）

〔補足〕震災から14年たち、在校生はほとんどが震災以降に生まれた子供たちである。ふるさと創造学によって地域の理解を深め、自分の立ち位置をきちんと持つことで、たとえ外に出たとしても、外から双葉郡を見守るような子供に育つのではないか。

○日向委員（文部科学省）

〔感想〕先週、大臣とともに、ふたば未来学園と学び舎ゆめの森を視察させていただいた。大臣は大変感銘を受け、文部科学省としても取組内容の広報などしっかり手伝っていくように指示を受けたところである。今後も双葉郡の子供たちの教育について積極的に関わらせていただきたい。

○柗木教育総務課長（福島県教育庁）

〔感想〕県立只見高校において探究的な学習の充実により、生徒の学びに向かう意欲が高まり、進学希望者が増加傾向となったが、進学を希望しても、将来は只見に戻ってきたいと考える生徒が増えたという話があった。福島県が首都圏の18歳以上35歳未満を対象に行った調査において、福島県への愛着形成は、学校で地元のことを学んだり地域の人と交流したりしたことが強く関わっていた。このようなことから、地方創生・人口減少対策としても、地域において学ぶ探究的な学びには、大きな期待を抱いている。ビジョン協議会の強みは、やはり8町村の横串・連携という強さ。人的にも物的にもそういった資源をビジョン協議会の中でいろいろ共有していければよい。こういったつながりはやはり、国の支援とイノベ機構の関わりもあってのこと。

○塩手委員（復興庁）

〔感想〕移住者の増加に伴って子供の数も増えているという報告に触れ、復興が着実に進んでいると感じる一方で、教員や支援員の不足など、共通の課題についても認識した。少子高齢化の中で人材確保は全国共通の課題でもあり、今後ますます人材の獲得競争は激しさを増すと考えられる。デジタルの活用と人材のシェアによって乗り越えていく必要があると感じた。

○氏原委員（復興庁）

〔感想〕ふたば未来学園中学校・高等学校の資料を拝見し、横の連携、教育機関同士の横の連携がよく図られていると感じた。ただ、縦の連携、大学など高等教育機関との連携の観点も重要であり、我々としても、そうしたネットワークを支えていきたい。

○高谷 OBS（F-REI）

〔感想〕各町村の課題は私どもF-REIと非常に関連の深いテーマである。令和10年にF-REIの建物が建つころには国内だけでなく外国からも多くの研究者が集まってくる。彼らは探究が仕事であり、探究学習とのコラボレーションも可能性として考えられる。双葉郡の未来にF-REIがいなければならない。それは、F-REIの組織だけではなく、派生する技術や関係する企業などを含めてであるが、そうしたものを集積して双葉の未来をつくりあげることが国の方向性であり、私どもはその一角を担っていきたい。

5) その他

(1) 委員からの情報共有（意見なし）

(2) 今後の協議会開催予定

○中田座長（放送大学）

次回の第30回協議会は、例年に従い、来年1月～2月を予定している。日程は改めてご相談申し上げたい。

○館下副座長（双葉町）

〔補足〕第30回は双葉町が担当だが、仮設校舎での子供たちの様子や教職員の奮闘ぶりをご覧いただき、その後に協議会を開催させていただきたい。仮設校舎から協議会の会場まで移動していただくことになるが、よろしくお願ひしたい。また、昨年度、全国の町村教育長会において、「ふたばの教育」を全教育長に配布し、教育復興ビジョンを全国に紹介させていただいた。このような形で少しずつ全国に発信していきたい。

4. 閉会

(以上)